

BOOK  
REVIEW

## 「哲学する」ことの楽しみを実感しよう!

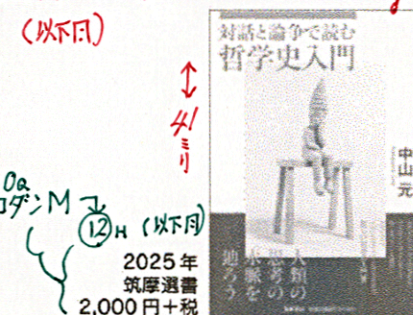
『対話と論争で読む 哲学史入門』 中山 元 著

中山 元 著

哲学界の重鎮、中山元氏が新たに素敵な著書をプレゼントしてくれた。タイトルは「対話と論争で読む 哲学史入門」。これまで哲学に縁がなかった人でなければ、改めて哲学史を読み直そうとする人はいない。そもそも教科書のように記述された歴史書は暗記物であり、退屈極まりない。しかし本書にはそんな懸念は無い。いったん開けばぐいぐい引き込まれる。

著者は1949生まれの現在76歳。研究歴がすごい。翻訳書も図抜けている。ニーチェ、ミシェル・フーコー、モーリス・メルロ＝ポンティ、エマニュエル・レヴイナス、ハンナ・アレントなど、哲学界の領袖に果敢に挑む。マルクスの『資本論 経済学批判』もあり、幅広い専門性は驚嘆に値する。最近もカントの『判断力批判』を訳し、精力的な活動はとどまることがない。本書が百科全書的な特徴を示すのも、これまでの研究の蓄積があったからにほかならない。

ある問いにある解答が提示されれば、それはおかしいのではない、むしろこう考えるべきではないか。いやいや、それでも駄目だ。もっと優れた解答がある。一つの解答に反論や異論が待ち構えている。テーゼ、アンチテーゼ、ジンテーゼとは、ヘーゲルの著名な弁証法だが、まあかしてしかない。テーゼ、アンチテーゼに続くのは、アンチテーゼに対するアンチテーゼであって、ジンテーゼではない。いつになっても最終的解決にたどり着くことはない。本書でも触れられているが、ヘーゲルはどうして市民の自由の最終的発言は国家などと考えたのだろう。哲学史とは標題のとおり、対話と論争の



とめどない歴史なのだ。その知のダイナミクスを存分に味わわせてくれる。

哲学の問いは大きく分けて、ほぼ三つの道筋からなるようだ。一つ目は「世界はどのようなものか」(存在論の問い)、二つ目は「わたしという自己はどのようにして生きるべきか」(倫理学の問い)、そして三つ目は「人間はどのようにして他者や国家や社会を構築して生きるべきか」(政治哲学の問い)である。これら三つを基軸にした全3章の問いの立て方が好奇心をひどくくすぐる。「世界は何でできているか」「存在するとはどのようなことか」「無は存在するか」等々。さあ、答えてみて。クイズの出題みたいだ。難しい質問ばかりだが。

これらの問いに名だたる哲学者が次々に解答者として登場する。立論、反論・異論がパレードのように行進する。第1章の始まりである、世界はどのようなものからできているか、との問い。哲学の最初の営みであるギリシャ哲学において、この存在論的な問いに最初の答えを出したのがタレス。万物の始元は水と答え、その根拠として生命のあるすべてのもののうちには、水が靈魂のような物質

として存在していることが挙げている。しかし、彼の弟子のアナクシマンドロスは、世界はある無限定なもの(ト・アペイロン)から作られていると主張。さらにヘラクレイトスは、世界は火でできていると唱えた。いやいや、アナクシマンドロスの弟子のアナクシメネスは、元のもの(始源)は空気だと言った。その根拠は? 果たしてその正当性は?

最初から従順に読む必要はない。つまみ食いOK。「自分とは何か」。きつと、もっとも身近で、ぜひとも解き明かしてみたい疑問ではなからうか。第2章で追究されるのは、徳・善を拠り所に考察したギリシャ哲学、原罪の文脈で論じられたキリスト教の時代、人間の主体性を焦点にして論争が生じた近代の哲学などである。自由意志という観点では、実存主者のサルトルが登場しないわけではない。どうして嘘をつくの? との問題設定もある。

現在の不穏な世界という関心からは、第3章で問われる戦争と平和の議論に目が向けられるだろう。当然それをテーマにした論考があるクラウゼヴィッツ、ルソー、カントなどが登場。彼らはどう解決しようとしたのか。対峙してみよう。

そうなのだ。本書の優れた価値は、人間、世界についての認識および存在をめぐる哲学の根本的な問いに対する哲学者の解答に接しながら、読み手各自がそれらと対話し、独自に考える、本書のタイトルを借りれば、「論争」するぐらいに徹底して考えてみる機会とするところにある。「哲学する」ことがいかに楽しいか、きつと実感できるだろう。

関本 英太郎

## 二百年前から変わらない旅の心得

『現代訳 旅行用心集』

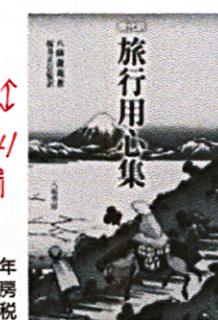
八隅 蘆菴 著 / 桜井 正信 監訳

江戸時代は藩が国家であり、通行手形つまりパスポートを持たずに隣藩つまり外国に出ることは、基本的には許されなかった。そもそも、生涯を地元で過ごすのは普通のこと、山に生まれて、死ぬまで海を見なかった者もいたらしい。ところが江戸幕府も、医療目的と宗教上の参拝は禁ずることができず、江戸中期以降は庶民も旅に出るようになった。湯治やお伊勢参りなどである。参勤交代による大名行列もあり、街道とその途中の宿場には旅籠なども整備された。とは言っても、旅は一生に一度行くかどうかなので、誰も旅には慣れていなかった。また、現代に比べればはるかに危険が多く、旅は命懸けでもあった。そこで、当時としては珍しく旅慣れた市井人である著者が、何度も繰り返し尋ねられてきたことを、えいとい冊にまとめ上げた旅の手引きが本書である。二百年以上も前の古い本が現代語訳されて出版されているのは、研究目的の学術的意義ではなく、古典や歴史に詳しくない一般読者が読んでも楽しめるからである。

面白さが二つある。一つは、そんな昔の話が、現代にも通じることである。腹痛には反魂丹、くたびたら足の三里に灸、水が変わって体調を崩したら五苓散など、そのまま何も変わっていない。船酔いの対処法では、ちょっと試してみたいことが書かれている。見知らぬ旅人同士が同じ部屋で寝泊まりする雑魚寝の旅籠や風呂での気遣いや、飲食店での振る舞い方なども、そのまま現代にも通じる。これらはどれも、国内だけでなく海外旅行でも同じだろう。初対面で、しかも二

度と会うことはない相手に対しても、相手の立場になって考えて行動する基本が述べられている。道中の日記や絵の残し方も、そっくりそのまま現代にも当てはまる。

もう一つは、当時の旅の様子がうかがい知れる面白さである。実に興味深い。現代のように交通網も情報網も整っておらず、文字通り地に足がついた徒歩であった。道中は一歩ずつ景色が変わり、空気の匂いが徐々に移り変わるのを感じながら己の足で進む様子が思い浮かべられる。今は新幹線や航空機で、ビュンッと一気に目的地に着いてしまい、通り過ぎる土地について何一つ感じることはない。座っている間に、下手すると居眠りしている間に着いてしまい、苦労がないだけ楽しみもない。それに、昔は気象衛星も天気予報もなかったが、明日の天気はどうにかして知りたい。空模様や生き物の様子から、明日の天気を見極める言い伝えが数多く載っている。著者は、これが地方によって違うことも述べている。確かに、日本海側と太平洋側で、山と海で、気候が違うのは当然である。自然とうまく付き合い、少ない道具を便利に使う工



夫を、本書のあちこちで垣間見ることができる。

現代人が本書を読めば「昔は遅れてたんなやなあ」と、江戸時代の人たちを鼻で笑うかもしれない。でもそれは間違いである。昔は東大がなかったから東大生がいなかっただけで、昔から東大生並みの切れ者は各地にいて社会を変えてきたし、その当時の最先端技術を駆使した旅をしていた。携帯電話はなかったのだから、なくても不便と思わなかったのである。もし今の平和な世の中がこの先も続いたとしたら、百年先の人たちは、この今の暮らしを馬鹿にするかもしれない。しかし私たちは、今なりに最先端を生きている。それと同じである。

巻末付録には、全国の街道と宿場が記されている。宿場間の距離は「ここで泊まるか、もう一つ先まで歩くか」を決める参考にしたのだろう。諸国の温泉地の湯の効能は、今でも通用しそうである。湯治で自分の病気に効くかどうかは「入った後にお腹が空いて食べ物がおいしければ合っている」と述べられていて、大きくうなずいた。

忙しくて、なかなか旅に出られない読者も多いだろう。しかし「忙しい」という言い訳は「自分にとって優先順位が低い」と同義である。どうしてもしたいことは、何を置いてもするものである。旅の優先順位を高めてみよう。スマホの画面では感じられない空気を吸うために。

水谷 光 (市立貝塚病院 麻酔科・中央材料室)

# BOOK REVIEW

読用

## 惚れた目には痘痕(あばた)もえくぼ

26a

80%+20%  
←長体80%  
←160%  
39e

### 『先生！なぜその生き物に惚れたんですか？ 生物学者10人の研究ものがたり』

ほとんど0円大学編集部 著

「ほとんど0円大学」とは書評子には初耳である。前書きを読むと、花岡正樹氏を編集長とする「大学の魅力を広く社会に伝えるためにはじめたウェブマガジン」であり、本書はその中の人気企画である「珍獣図鑑」からのスピンオフ作品らしい。

なるほど、大学（高等教育機関）というのは現代社会の中では絶対的に必要な組織であるが、過去には多くの人々にとって縁のないものであった。書評子が高校を卒業した1970年頃は、大学（短大を含む）に進学するのは同学年の5人に1人くらいで、普通科高校以外から進学するものはほとんどいなかったが、ここ10年ほどは2人に1人は大学に行くようになった。いわゆる「大学の 대중化」、である。

書評子が学生であった頃には「大学のレジャーランド化」という批判があった。大学に入ったのはいいが、ろくに勉強せずに遊んでばかりいる（高卒デ勤勉ニ働イテイル同世代人ニ申訳ナイト思ワナイノカ！）という主旨だ。しかし2人に1人が大学に進む時代ともなれば、さまざまな考え方や行動様式をもつ人たちに広く門戸を開くべく、情報を公開するのは当然の成り行きである。そのことで学問に勤しむ人が増えたらいいではないか。大学にはこんな魅力的な教師がいる、こんな知的好奇心を揺さぶる体験ができる、こんな楽しみがある、などだ。金のためにしている仕事はいったんやめて、あるいは退職して、あらためて大学に入学し新しい勉強を始めるという行動も、現在ではさほど奇異な目で見られなくなった。自由業、遊民ならもっとハードルは低い。

「ほとんど0円大学」では、「おとなも大学を使っちゃおう」をテーマに、公開講座、大学博物館のレポート、学食の



2025年  
玄光社  
1,800円+税

紹介などをしてきたが、その活動の一つである研究者インタビューのうち、生物学者を紹介したものが本書である。本書で取り上げられた10人の生物学者の研究対象は、ウォンバット、ナメケモノ、キイロシリアゲアリ、シャチ、ナマコ、カモノハシ、オグソクムシ、ナメクジ、カラス、ダイオウイカ、である。いかがであろうか。野生・稀少生物種と、そのあたりにいくらかでも転がっているが、好意的な関心を寄せられていない生物種の二つに分けられそう。いずれもそれを研究対象として日々取り組んでいる研究者がいるのだ。面白い。なお、ナメクジの研究者は本誌2020年12月号の書評に登場した松尾亮太博士ではない。別人である。ということはナメクジの研究者は少なくとも国内に二人いるのだ（もっといはずだ）。ちなみにゴキブリの味覚を研究して「世界で唯一の存在」を自覚する勝又（和田）綾子博士は、本書には登場しない（残念）。

医療の世界でも似たところがある。某大新聞の科学部の記者から聞いた話によれば、「医療関係だと、癌とか遺伝子の取材をやっているのが主流派で、私みたいな○○とか××とかをやっているものはマイナー」なのだそう。ジャーナリズムはそれでもいいかもしれないが、医

療はどんなまれな疾患でも見落とさない、見捨てないことを是としている（統計学で医療をしてはならない理由の一つである）。書評子の経験だけでも「悪性高熱症疑いの筋生検？ あ、それはA病院のB先生に連絡して」とか、「トリカブト中毒でアコニチンの血中濃度測定？ それはX大学Y教室のZ先生に連絡して」などということがあった。また褐色細胞腫の手術の際、摘出した腫瘍から標本をもらうために遠方から来院していた医師も見つかったことがある。国内発症例のほとんどを把握しているのだそう。その熱意たるや、本書のタイトルを借りるなら「なぜその病気に惚れた（？）んですか？」と言っていいかもしれない。

それにしても地球上には実に多種多様な生物が共存しているものだ。それはとりもなおさず、さまざまな環境があり、その環境に適応した生物がそれぞれ固有の進化を遂げながら今日に至っているということである。

本書の内容を評するのは、書評子があれこれ言うよりも、編集長の花岡氏が「はじめに」として書いた文章がすべてを表現しているのではないだろうか。すなわち「ほとんど0円大学で研究者を取材していると、研究者の数だけ知らない世界があるのだとつくづく感じます。単に知識量を指してそう表現しているのではありません。（中略）思ってもみなかった価値観や考え方、ものごとの捉え方などに触れることができ、そこに知らない世界の片鱗を垣間見ることができるからです（後略）」というものである。まさに学問の醍醐味というべきであろう。学問は楽しいのだ。

福家 伸夫  
(帝京大学ちば総合医療センター)